

(巻第一)

書付

此絵詞十卷外題依金蓮寺廿三代
上人所望染愚筆者也

文祿第二林鐘念二

二品親王(花押) 誌之

第一段

夫以西天乃黄老王教法を

□の境にひろめ東漢

□を京師の間に

伝しより以来生死を出過し

涅槃に帰入するに二種の勝法

□一には聖道門二には

浄土門也聖道に又二あり

顕密二教是なり共に娑婆

□待て同穢土の成

仏を期す是以一心三觀の

窓の前には真如一実の月光

□密五相の壇の上

には心城八葉の花匂を翫ふ

故に已心に実報寂光の

□即心に密嚴華藏の

界を望む教の本意然へしと

いへとも正像すてにくれて末法

□行證共に絶て教法

ひとりこのれり仍即身の証に

をきてみつから退心を起て

□七千万歳の霞を

隔て遙に龍華の春の朝を

まち或は多生曠却流転生

□かさねて遠く覚月

の秋の空を望む結縁まことに

貴しといへとも即証已に空に

□則理ふかく解微きか

故なり次浄土門とは末法萬

年の流通慈悲を余経悉滅

□ほとこし人寿十歳の利物

本誓を無有出離の機に発し

給最下の根機に蒙らしめて

□深法をあたへ意地の動

静を用すして口業の称名を

勧るこれを超世の願となづけ

□難信の法といふ機の勝劣

をいハされハ三輩九品ひとしくゆき

行に多少を論せされハ一形十念

□く生す而にをのつから本願に

帰し名号を唱る人ありといへ

とも多ハ三業にとまり又は

四儀に煩て宗旨にくらく安心に

もとつかさる間往生を遂るもの

まれなる敷是併祖師の教籍

にそむき先徳の遺誠に違する

故也爰近來一遍上人と申

し聖の念仏勧進の趣承る

こそ有かたく覺侍れ此人は

伊予国阿野七郎通広か子也

建長年中に法師に成て学問

などありける比親類の中に

遺恨を挿事ありて殺害せむ

□しけるに疵を蒙なから敵の

太刀をうハい取て命ハたすかり

発心のハしめ此事なり

けるとかや

第二段

建治二年の夏熊野へ参詣

し給山復山青巖に雲をふミ

水亦水碧潭に波をしのかく

玉津嶋の叢祠に望めハ光無

明の闇をてらし岩田河の流水

をわたれハ波生死の垢を洗ふ

かくて次第に詣給程に律僧の

行逢けるに聖勸云一念信を

発して南無阿弥陀仏と唱て

此算をうけ給へと僧答いハく

たゝいま一念の信心発侍らすうけハ

即妄語なるへしとて承引せず

而に此僧念仏をうけハ若干の

道者同く受くへかりける間念仏

勧進の方便のために必信心おこ

らすともたゝ南無阿弥陀仏と

申て算をうけ給へしといハれける

しからハとて受けられハ残の道者
おなしく札をうけぬしかし勸進の
趣冥慮を仰へしとて本宮証
誠殿の御前にして願意を

祈請し給う目を閉て未まどろま
さるに御殿の御戸ひらけて
白髪なる山臥のけたかくきよけ
なるか長頭巾かけて出給長床に
山臥三百人ハかり侍るか首を地に
つけて札敬し奉る此時権現に

て御座しけると覺て信心弥
おこれりけるにかの山臥聖の
前へ歩みよりの給やゝあの融

通念仏勸らるゝ聖いかに念仏
をハあしく勸らるゝそ御房の勸に
よりに始て衆生の往生すへきに
あらず阿弥陀仏十却正覺に一
切衆生の往生ハ南無阿弥陀仏と

決定する所也信不信を論せず
淨不淨を嫌はずたゝ其札を賦
てすゝむへしと示給と覺て目を
開てみれハ十二三許なる童部
百余人来て念仏のふたを受て
いつちともなく去にける小神達の

念仏勸進の誓を遮て顕給かと
貴し大権の神託に預て後他力
本願の深意を領解せりとそいはれ
ける抑当山権現ハ考照天

皇の御宇紀州無漏郡備里に
跡を垂給（依）爾しより以来一千
七百余歳の曆数を経たり已に
所を無漏の郡となつく豈有為の
境ならむや伝聞一たひ此砌に詣
るものは二たひ惡趣に帰らすと

誠に此謂敷十却成道の如来内
証を秘して暨垂跡の方便を
めくらし五却思惟の誓願外用を
ほとこしてつゝに本地の利益を
あらはす証誠殿と号し奉る

六方恒沙の諸仏もかくのことく
不可思議の功德を称讚し給敷
名利を祈ものは必菩提を証せ

しめ仏果を求る輩にハ正く
寿福を授く此悲願余社に超給
ゆへに本朝第一大靈験の名をえ
給へりしかるにいま聖祈請の旨
神慮に叶けるにやまのあたりかゝる

靈託に預給事有かたくぞ侍る
これによて本願の名号を荷て
国々を修行し普衆生に念仏を
勸給給さて大隅八幡宮へまうて
られけるに御神の示給ける哥

とことハに南無阿弥陀仏とゝなふれハ
なもあみた仏に生こそすれ
かくて村里に至つゝ念仏の算を

うハリ給算云南無阿弥陀仏（依）
此中に六八のを弘誓を標して一乗
の機法をあかす因中の萬行功を
六字におさめ果号の一称益を
十方にほとこす是則一切衆生決

定往生の記前を授る者也
聖頌曰
六字名号一遍法 十界依正一遍体
万行離念一遍証 人中上々妙好花
又云
十劫正北衆生界 一念往生弥陀国
十一不二証無生 国界平等坐大会

或時よみ給ける
捨やらて心と世をハなけきけり
野にも山にもすまれける身を
すてゝこそみるへかりけれ世中を
すつるもすてぬ習ありとは

第三段
建治二年の比九国を修行し
給ける時他阿弥陀仏始て隨
逐し給さて鎮西より洛陽の方へ
趣給けるに弘安元年冬のところ
備前国藤井とかいふ所の領主

なるかもとにおハして念仏すゝ
め給けるにむすめなりけるもの
聖をたとひ法門聴聞して俄に
さまをかへぬかくて聖は福岡の市
といふ所にて念仏勸給ほとに

かの夫は備中の吉備津宮の
神主か子也折節他行したり
けるか帰来て妻女をみるに
はからさるに尼に成にたり目も
あやに浅樹とともいハむかたなし
事のゆへを尋に妻女答て云
貴き捨聖のをハしつるか出離生
死の趣念仏往生のやうとかるゝを
聴聞し侍しに誠にゆめまほろし
の世あすを期すへき命にもあらねハ
かりの姿はともかくても有なむ
とおほえてかくなりにたりとそいひ
ける夫ハもとより無悪不造の
者なりけれハおほきにいかりてかの法師
いつち行ぬらむ尋てきりころさ
むとて大太刀わきにはさみてハや
福岡の市へゆくなるへし其気色
なる神の踏とゝろかし木枯の風
の吹はらふよりもはけし秋の霜
を帯たるさま春のこほりをふむ
よりもあやうしはたして聖たちに
行逢ぬすくよかに聖の前にすゝみ
近付けれハこゝらの市人あなあさ
ましとみる程に聖聊も驚ける
さまにハあらて未み給ハさるものに
向て汝は吉備津宮の神主か
子息などの給ハせけるにこそ身の
毛いよたちて忽にいかれる心を翻し
たけき心ちも今更まほに思成に
けれ女性にて発心しけるもいとこと
はりに覺て聖を知識として
出家をとけぬ彼楊州の屠士か
和尚を殺さむとせし九品を掌の
うちに拝して忽に捨身往生の
瑞をあらハし今備前の勇士か
上人をあやまたむとする一念を
言下に翻て即出家修行の道に
入る古今の奇特ことなりといへ
とも機法の感応是をなしき
もの歟

或時結給頌曰

六字之中 本無生死

一声之間 即証無生
又よみ給ける
思とけハすきにし方も
行すゑも一むすひ

なる

夢の世の

中

(巻第二)

第一段

同二年信濃国佐久郡伴野
といふ所にて歳末の別時に
紫雲始て立侍りさて其所に
念仏往生をねかふ人ありて聖を
とゝめ奉りけるころそゝろに
心すみて念仏の信心もおこり
踊躍歡喜の涙いともろくおち
けれハ同行ともに声を調て念
仏しひさけをたゝいてをとり給け
るをみるもの随喜し聞人謁仰
して金磬をみかき鑄させて
聖に奉けりしかれハ行者の信
心を踊躍の兒に示し報仏の
聴許を金磬の響にあらハして
長き眠の衆生を驚し群迷
の結縁をすゝむ 抑をとり念仏ハ
空也上人或は市屋或いは四糸
辻にて始行給けり彼詞云
心無所縁随日暮止身無所
住随夜曉去忍辱衣厚不
痛杖木瓦石慈悲室深不聞
罵詈誹謗任口称三昧市中
是道場随声見仏息精
即念仏夜々待仏来迎朝々
喜最後近住三業於天運讓
四儀於菩提文其よりこのかた
まなふものおのつから有といへ
とも利益猶あまねからす而今
時至り機契して化導諸国に
ひろかりけるにや誠に能忍慈尊
二仏の中間にも世々に仏出給
て濟度利生し給かとそ貴み

あへりし

或時よみ給ける

聖

惜なにまよふ心ハおほえ山
いく野々露ときえやすき身そ
思しれうき世の中の墨染の
色々しさにまよふ心を

第二段

同三年奥州へ越たまふ修行
日を送て地形一にあらす月ハ
野草の露より出て遠樹の
梢をいとはぬ境もあり日ハ海
岸の霧に傾て双松の緑に
うつろふ所もありかくて白河
の関にかゝられけるにせき屋を
月のもる影ハ人の心をとむる
なりけりと西行のよむ侍ける
思出られて関屋の柱に書付
給ける

他阿弥陀仏

白河の関路にも猶とまらし
心のおくのはてしなけれハ
聖も又よみてかゝれける
行人を弥陀のちかひにもらさしと
名をこそとむれしら川の関

第三段

さていまは遙にみちの奥にも
分入ぬる心地して里の名を
とへハちかのしほかまとなむ
こたふる程に明神に念仏法樂
して松嶋へまうてられたりける
こゝハ見仏上人の旧跡といふ
をきゝて

他阿弥陀仏

むらさきの雲の迎へを松嶋や
仏みるてふ名さへなつかし

第四段

弘安五年相模国龍口といふ
所にて利益せられたるに鎌倉の

辺土なれば貴賤上下群集す
紫雲の立朝もあり花のふる
夕もあり瑞相一にあらす其比

詫麻僧正（法壽）送給状云

仏子公朝胡跪合掌而言

南無西方極樂化主阿弥陀仏

南無觀音勢至諸菩薩清淨

大海衆照無二之誠心哀專一之

勤修歳去歳来往生願無倦

若坐若立称念功漸積而聞上

人济度之悲願溺下愚随喜之

淚行且為結縁且為值遇奉

寄書信於沙村之淨場欲期引

導於金刹之妙土縱有前後之

相違莫忘慇懃之芳契恐々

敬白

五月廿六日 法印公朝状

還來穢国上人足下

くもりなき空にふけゆく月もみよ

心ハにしにかたふける身そ

返報云

一称名号中 三尊垂化用

十方衆生前 九品顕来迎

くもりなき空ハもとよりへたてねハ

心そ西にふくる月かけ

南無阿弥陀仏 六十万人知識一遍

此人ハ園城一流の智徳として

柳營数代の護持を致す和漢

の好士優色の名人なるを上人に

帰依し給さま等閑ならさりしは

み奉り思へる所なからむやとそ

侍りし

或人念仏法門尋申けりに

念仏往生ハ念仏即往生也南無と

いふハ能帰の心阿弥陀とは所帰の

行心行相応する一念を往生と

いふ南無阿弥陀仏と唱てのち

我心の善悪是非を論せず後

念の心用さるを信心決定の

行者とハ申なり只今の称名の外に

臨終あるへからすたゝ南無阿

弥陀仏くくと唱て命終するを

期とすへし

第五段

同年七月の比駿河国井田と

云所におハしける時味坂の入道

と申もの時衆に入へきよし申

けれどもゆるされなかりけれハさて

いかにとして生死をハ離侍へき

そと申にたゞ念仏申てしぬる

より外ハ別事なしとの給けるに

さてはやすきことに侍り蒲原にて

待奉へしとて行けるか富士河の

はたに立寄て馬にさしたる縄を

ときて腰につけて汝等つゐに

引接の讃出すへしといひけれハ

下人ともこハいかなる事そと申に

南無阿弥陀仏と申てしねハ仏

来迎し給と聖の仰られつれハ極

楽へとくしてまいるへし名残を

おしむ事なかれとて十念唱て

河に入にけれハやかて紫雲水に

うつろひ音楽浪にひゞく暫あ

りて縄を引あけたれハ合掌の

印すこしも乱れす往生の相め

てたかりけるとなむ聖の哥云

心をハ西に懸樋のなかれ行

水のうへなるあはれ世中

第六段

尾張国甚目寺ハ推古天皇

御宇蒼海の底より観音の

像を感得し奉て伽藍を建立

す靈験無双の本尊なり爰

聖請に応して当寺にして七

箇日の行法を始行給けるに

供養力尽て寺僧等歎合けれハ

聖曰志あらハ何日なりとも留へし

衆生の信心より感すれば其志を

受ハかり也されハ仏法の味を愛樂

して禪三昧を食とすといへり若

身のために衣食を事とせハまたく

衆生利益の門にあるへからすと

在家に立向ハ是随類応同の儀

なり努々なけき給へからす我と

七日をますへしとの給ける其夜

萱津宿に侍る在家人あまた同

時に夢想を蒙る此本尊の傍に

まします毘沙門天に彼宿におハして

我一大事の客人を得たり必供

養すへしと示給仍其朝相伴て

夢想のやうしかくと語申て供養を

のへける時みたてまつれハ此毘沙門

御座を去て歩出給へり人皆不思議

のおもひに住して寺の伝記に

載畢彼多門天ハもとよりかゝる

靈験をあらハし給事おほしとそ申

伝たる又僧尼兩方の隔に十

二の箱を置いて蓋の上に白き色を

四五寸ハかり一筋とをされたり是ハ

水火の中路白道になそらへて

男女の愛恚の煩惱をさけむか

ためなり数十二八十二光日没の

礼讃の心なるへし又ハ函蓋相

応の儀能所不二の理を表され

けるにや

或時書給誓願文云

我弟子等 願従今身 尽未來際

不措身命 帰入本願 畢命為期

一向称名 不説善惡 不行善惡

如此行人 依本願故 阿弥陀仏

観音勢至 五々菩薩 無数聖衆

六方恒沙 証誠諸仏 昼夜六時

相続無間 如影随形 無暫離時

慈悲護念 令心不乱 不受横病

不遇横死 身無苦痛 心不錯乱

心身安樂 如入禅定 命断須臾

聖衆来迎 乘仏願力 往生安樂

又或人法門尋申けるに書て

つかはされける

聖

春過ぎ秋来れともすゝみかたきハ

出離の道花を惜月をなかめても

起やすきハ輪廻の妄念也罪障の

山にハいつとなく煩惱の雲厚して

仏日の光眼に遮らす生死の海に
は鎮に無常の風ハけしくして
真如の月やとる事なし生を受に
随てくるしみにくるしみをかさね
死にかへるに随てくらきよりくらき道
におもむく六道の衢にハ迷はぬ
所なく四生の枢にハやとらぬ棲なし
生死の転変をハ夢とやいはむ
うつゝとやいハむこれを有といハん
とすれハ雲とのほり煙ときえて
むなしき空に影をとゝむる人なし
なしといハむとすれハ又恩愛離別
のなけき心の内にとゝまりて腸を
たち魂をまとハさすといふことなし
彼芝蘭の契の袂にかハねをハ
愁歎の炎にこかせとも紅蓮大紅
蓮の氷ハとくる事あるへからず
鴛鴦の衾の下に眼をハ慈悲の
涙にうるほせとも焦熱大焦熱の
炎ハしめる事なかるへしいたつらに
歎いたつらに悲て人もまよひ我も
まよはむよりハ早三界苦輪の里を
出て程なく九品蓮台の都にまう
つへし爰苦悩の娑婆はたやすく
離れかたく無為の境界なをさりにして
いたる事を得ず遇本願の強縁に
あへる時いそきはけますしてハ何の
生をか期すへき他力の称名ハ不思
議の一行也弥陀超世の本願凡夫
出離の要道なり身を忘て信樂
し声に任て唱へし
又和讃をつくりて時衆にそ
あたへられける讃曰
身を觀すれハ水の泡 消ぬる後ハ人もなし
命を思へハ月の影 出入息にそ留らぬ
人天善所の形をハ 惜とも皆たもたれす
地獄鬼畜の苦ミは 厭とも又受やすし
眼の前のかたちハ 目しゐてみゆる色もなし
耳の辺のことのハゝ 耳しゐて聞声そなき
香をかき味なむること 只暫しの程そかし
息のあやつり絶ぬれハ 此身に残る功能なし
過去遠々の昔より 今日今時に至まで

思とおもふことハみな かなハねハこそかなしけれ
聖道浄土の法門を さとりと悟人ハミな
生死の妄念尽すして 輪廻の業とそ成にける
善悪不二の道理にハ 背ハてたる心にて
邪正一如と思なす 冥の知見そハつかしき
煩惱即菩提そと 聞て罪をハつくれとも
生死即涅槃とハ いへとも命を惜かな
自性消淨法身ハ 如々常住の仏也
迷も悟もなき故に 知もしらぬも益そなき
万行円備の報身ハ 理智冥念の仏也
境智二もなき故に 心念口称に益そなき
断惑修善の応身ハ 随縁治病の仏なり
十悪五逆の罪人に 無縁出離の益そなき
名号酬因の報身ハ 凡夫出離の仏なり
十方衆生の願なれハ ひとりもゝるゝ過そなき
別願超世の名号ハ 他力不思議の力にて
口に任て唱れハ 声に生死の罪消ぬ
始の一念より外に 最後の十念なけれとも
思をかさねて始とし 息のつくるを終とす
思尽なん其後に 始め終ハなけれとも
仏も衆生も一にて 南無阿弥陀仏とそ申へき
早万事を抛て 一心に弥陀をたのみつゝ
南無阿弥陀仏と息絶る 此所思のかきりなる
此時極樂世界より 弥陀觀音大勢至
無數恒沙の大聖衆 行者の前に顕現し
一時に御手を授つゝ 来迎引接たれ給
或野原を過られけるに人の骸
骨おほくみえけれハ
聖
おしめともつゐに野原にすてゝけり
はかなかりける人のはてかな
はかなしやしハしかはねのくちぬほと
野原の土ハよそにみえけり
かハにとそおとこをんなの
色もあれほねに
は
かはる人かたも
なし
(巻第三)
第一段
江州大津の関寺に着給けるに

叡山桜本兵部阿闍梨宴聡と

いふもの侍り一遍房の関寺に

あむなる行て法門いひて御房達に

つめてきかせむといひけるを処々

にても学匠多く帰伏のよし聞へ

侍りいかゝあるへからむと門徒に制し

けれとも何程の事かあるへきとて

行向ぬ宴聡一遍聖と責合へか

なりときゝて若学匠共はしり集て

みけるに宴聡聖の前へ近く居より

たりいかゝ発言せむすらんと耳を

すましたるに折節暑預をめしけるを

くいきりてあの御房これめせとて

指出されたりたりけるを左右の手をいた

して請取てくいける間庭上に

立ならひたる大衆同音にはとわらひ

ける中に全範美濃堅者と云ける

悪僧面にあらハれてつむるまでハ思よ

らしおろしをくひつる上ハと高声

にいひけれハ諸人比興の事にのゝ

しりあへる程に宴聡もおかしけに思て

をとりて念仏申さるゝけしからすと

はかりいひければ

聖

はねハねはをとらハをとれ春駒の

のりの道をハ知人そしる

返事 宴聡

心こまのりしつめたるものならば

さのミハかくやをとりハぬへき

聖

ともハねよかくてもをとれ心こま

弥陀の御法ときくそうれしき

其後宴聡ハ発心して念仏の

行者と成て安樂の五坊に籠

居の心さし有けるか同朋共のとひ

来るも詮なく覺て小野宿の

辺に小泉といふ所に庵室むすひて

五穀を断し名号を唱て往生を

ねかひけるとそきこえし又或僧心

こそ詮なれ外相いかてもありなむと

いひけれハ

聖

心よりこゝろをえんと心得て

こゝろにまよふ心なりけり

又或時

心をハこゝろのあたと心えて

心のなきを心とハせよ

とにかくに心ハマよふものなれハ

なもあみた仏そ西へ行道

第二段

同年閏四月十六日関寺を立て

洛中へ入給四条京極の釈迦堂

にて念仏ありけるに程々の瑞相

耳目を驚かしけれハ馬にむちうち

車にあふらさして門前市をなす

其時入道さきのうちのおほいまうち

きみ一念往生の法門尋申されて

後に奉給ける

一声とほのかにきけと郭公

なをさめやらぬうたゝの夢

返事 聖

郭公なのるも聞もうたゝねの

夢うつゝより外の一声

同出離生死の趣尋申されけるに

他力の称名ハ不思議の一行なり

弥陀超世の本願凡夫出離の直

道也諸仏の深智必所及況三

乗浅智の心をうかゝハむや唯諸教

の出離を耳に留すして本願の名号を

口にとなへ称名の外に我心を用

さるを無疑無慮乗彼願力定得

往生といふ南無阿弥陀仏と唱て

我心のなくなるを臨終正念といふ

此時仏の来迎に預て極楽に往生

するを念仏往生といふ也

又頭弁なる人念仏の安心尋

申されけるに

念仏往生とは我等衆生無始以

来十五逆四重誹法闡提破

戒邪見等の無量無数の大罪を

成就せり是によりて未来無窮の

生死に輪廻して六道四生廿五有

の間諸の大苦悩を受へきもの也

然といへとも法蔵比丘五劫思惟の
智慧名号不思議の法を覚侍て
凡夫往生の本願とせり此願已に
十劫以前に成就せし時十方衆生
往生の業南無阿弥陀仏と決定
すこの覚体阿弥陀仏といふ名に
あらはれぬる上ハ厭離穢土欣求浄
土の志あらむ人ハ我機の信不信
浄不浄有罪無罪を論せずたゝ
かゝる不思議の名号を聞得たるを
悦として南無阿弥陀仏と唱て
息絶命終らむ時必聖衆の来迎ニ
預り無生法忍に叶へきなり是を
念仏往生といふ

一遍

弁殿

第三段

其後雲居寺六波羅密寺次第に
巡礼して空也上人の遺跡市屋に
道場をしめて数日を送給しに勢至
菩薩の化身にて御坐すよし唐橋
院承法印靈夢の記を持って参たり
けるに念仏こそ詮なれ勢至ならずハ
信すましきかとそしめされけるさて因幡
堂に詣て給此尊ハ釈迦如来御自
作の靈像祇園精舎療病院の
本尊也長保年中月氏の雲を
出て日域の堺にうつり給当寺執行
覚順瑞夢の告有よし申ける間
逗留有ける比前天台座主菩提院
僧正
見参有て他力本願の法談などあり
けるに出離生死の業は念仏に思
定侍りぬ命のななき事を歎つるに
御済度に預へき宿縁にて侍けり
と悦給き又竹中法印承詮参て
阿弥陀仏の本願善導和尚の巢意
を自宗の法門に引合て尋申けるに
三ヶ日の間委細問答ありける程に
超世の悲願名号の機能を領解して
いかなる不思議の本願なりとも自宗の
三論即是の上の絶待不思議の

妙にハよも超しとこそ思侍つるに
誠に貴き超世の願力にて侍ける
承詮か出離ハ念仏におちつき侍ぬ
此恩徳申尽しかたしとて其後ハ円
頓速疾の妙行をさしを聞き他力本願の
名号に帰して往生をとけゝるとなん
かくのことくの明匠高德たち信敬し
給つる間末学浅智のともからハ
いはざるにをのつから帰伏しけるとそ
京中利益の後同年六月廿二日
桂にうつり給時聊わつらふことの
おハしけるに書いていたされける
夫生死本願の形は男女和合の
一念流浪三界の相ハ愛染妄境の
迷情也男女かたちやふれ妄境をのつから
滅しなハ生死本無にして迷情こゝに
尽ぬへし花を愛し月を詠する
動は輪廻の業仏を思経を思ふ
ともすれハ地獄の炎たゝ一心の本
源ハ自然に無念也無念の作用ハ
眞の法界を縁す一心三千に遍すれ
とも本より以来不動也然といへとも
自然の道理を失て意樂の懇
志を抽て虚無の生死に迷て幻
化の菩提を求む如此凡卑の族ハ
厭離穢土欣求浄土の志探して
息絶命終を喜び聖衆の来迎を
期して弥陀の名号を唱へ臨終
命断の刻無生法忍に叶へき也
南無阿弥陀仏

第四段

撰津国四天王寺ハ聖徳太子
の建立仏法最初の霊場也
伽藍は又釈迦如来転法輪の
古跡当極楽東門中心の勝地也
五十余代の帝王尊崇あらたま
らす六百余廻道場星辰旧
たりといへとも有鷹塔薨朽すして
露盤光かゝやき亀井流久して
法水絶事なし金鐸宝鈴の和
鳴せる風清浄の響を振ひ功德

莊嚴の微妙なり花実相の饒を
開く爰弘安九年聖参詣し給へり
其比金堂の御舍利つほの内に
とまりて出給はぬ事侍りけるを
不思議の事に申あへり当寺の歎
万人の愁たる間臨時に舞樂を
奏して伶人秘曲の袖をかなて昼
夜に肝膽をくたきて高僧密法の
数を尽すといへとも猶出給ハすして
数日に及へり而に執行聖へ聊御
祈念あるへき旨申ける間若御
舍利出給ハすハ永く寺中を出すして
命を尽へしと七日祈請して出給に
三粒の御舍利悉く出現給へり
常住の僧侶奇異の思を成し参
詣の尊卑謁仰の誠をいたせり
かくて参籠日数をかさね給間に
或時ハ瑞華風にみたれ或時は
靈雲空にたなひく凡不思議多
といへとも委くしるすに違あらず
或時よみ給ける

聖

おもふことなくてすきにし昔さへ
しのへハいまのなけきとそなる
いにしへハ心のまゝにしたかひぬ
今ハ心よわれににしたかへ

(巻第四)

第一段

正応元年十二月十六日豫州
三嶋社へ参詣あり当社ハ文武
天皇御宇大宝年中に跡を垂
給爾より以来五百余廻の鳳曆を
かさねて八十余代の龍図をまほり
まします彼社壇に三ヶ日の間念
仏法樂して別宮へ移給けるに海中
にて俄に空かきくもり雨しきりに
ふりけれハ聖是直事にあらず
明神即名残の袖をしほれとおほし
めすにこそとてわさとぬれ給けれハ
諸人おなしくぬれくぬれこき行
程に海鹿といふ大魚数をしらす

浪をたてく船の舳にはねをとり
けりすこしも人に恐るゝ事なし
半時ハかり有てうせにけり不思議の
事にそいひあへりけるさる程に
やがて年もくれけれハ別宮の社壇
にして恒例七日の別時ありけるに
三島大明神影向しましくて念仏
結縁のために来れるなりさても
三嶋を出給し時魚と化して送奉
りしハ知給けるにや否と明神御物語
ありしかはとかく申やる方なくて只
恭敬謁仰の信心はかりにて落涙
せられきと後日にの給けるにこそあり
し奇特も思あハせられて人皆信
をとり侍にけれ

或時聖頌曰

弘願一称万行致 果号三字衆徳源
不踏心地登霊台 不仮工夫開覚蔵

第二段

同二年正月廿四日夜三嶋宮の
神官社僧等に夢想の告有けり
一遍上人今一度当社へ請し入
奉へし我光をやハらけて塵に
ましハリしより以来三熱の苦を
受て未やむ時なし而上人の念仏
法樂によりて三熱の炎忽に消滅す
供養物など人の煩なるへからず桜会
の頭を留て経営すへしと示給といへ
とも恒例の御頭を留侍らむ事
憚ありて猶披露せさる処に三嶋
地頭社壇に通夜してすこしまとろ
みたりけるに白髪なる老翁の束
帯たゞしくて御殿の扉を排て
一遍上人を請し奉へきよし宮人
等に度々示すといへとも敢て用あす
汝急入奉へし若承引せすして我
をうらむなと示給時やかて夢覚ぬ
身の毛豎てをそろしなといふハかり
なし則此事を相尋ところに夢想
の告しかなりと五人同心に申ければ
霊夢嚴重の上ハ聖を請し奉へし

但桜会の御頭を留に及ハす各か
當たるへしとて同二月中旬に廿
艘の舟を調て今針といふ津へこき
むかへり其より船に乗て詣給けり
此度ハ大明神の御召請なりとて
万人瑞籬に歩をはこひけり神慮もさこそ
御納受あるらめとて時衆以下の

門弟恭敬謁仰の信心発ければ
行法も今一しほ貴かりけるとかや
抑当社にハ桜会并に大頭とて二度
の供祭あり彼大頭にハ一向魚鳥の
類をもて贄に備けるに上人庭の
踊の最中に御贄を精進のものに
申替むと思心俄に浮給けれハ即
宮人等に仰合られけるにこれ併神
の御託宣にこそとて自今以後は
精進の贄を供すへきよし各定
申けり昔もかゝる例侍り桜会の
頭にハ鹿の生贄を奉けるに書写
山性空上人参詣の時生贄を留ら
るへき旨祈請申されたりけるに
立ところに神殿動揺して随喜すと
答給けるによりて生贄をハ留て
けり先蹤といひ靈夢といひ感応
の趣新なる上ハとて参あへる神
官国中の頭人等聖の教に任て
向後たかふへからすと制文を書連署
して御宝殿に籠置けるとかや希
代の不思議とそ申侍し

或時よみ給ける
阿弥陀仏ハマよひさとの道絶て
たゝ名にかなふ息ほとけなり
をのつから逢あふ時も別ても
ひとりハいつもひとりなりけり
跡もなき雲にあらそふ心こそ
中く月のさハリとはなれ
心からなかるゝ水をせきとめて
をのれと洩に身をしつめつゝ

第三段

同年五月の比讚岐より阿波に
うつり給時機縁已にうすく成て

人数訓にかゝはらず生涯いくハく
ならず死期近にありとの給けるを
人々哀なる事に思合けるに其後
いく程なくて大鳥里河辺といふ
所にて七月一日より聊煩事のお
はしけるに

思ことみなつきはてぬうしとみし
世をハさなから秋のハつかせ
さて七月の始つかたに淡路のふく
らの泊に移給とて又よミ給ける
消やすき命は水のあハちしま
山の端なから月そさひしき
あるしなき弥陀の御名にそ生ける
となへすてたる跡の一声
名にかなふ心ハ西にうつせみの
もぬけハてたる声そすゝしき
かくなやミながら猶念仏すゝめて
ありき給けるに道のほとり塚の
かたハらに身をやすめて
旅衣木のね萱のねいつくにか
身のすてられぬ所あるへき
さる程に兵庫より迎へに船を奉
けれハいなみ野の辺にて臨終す
へきよし思つれともいつくも利益の
ためなれハ進退縁に任へしとて兵
庫嶋へわたり給ぬ

第四段

さて兵庫嶋へ渡て観音堂に
宿し給其比他阿弥陀仏病悩の
事ありけるに聖曰我已に臨終
近付ぬ他阿弥陀仏ハ未化縁尽ぬ
人なれハ能々看病すへきよしの
給而に光明福寺以下所々の長老
たち出来て御教化につきて機の
三業を離て念仏ひとり往生の法
と領解し侍ぬ然而猶最後の法
門承らむと申ければ三業外の念
仏に同すといへとも只詞はかりにて
義理をも心得す一念発心もせぬ
人共のとて他阿弥陀仏南無阿
弥陀仏はうれしきかとの給けれハやかて

他阿弥陀仏落涙し給上人も
おなしく涙を流給けるにこそたゞ人に
あらず化導をうけつくへき人なりと
申あひけれさて遺誠の法門を
書給其詞曰

五蘊の中に衆生をやまする病なし
四大の中に衆生をなやます煩惱なし
本性の一念を背て五欲を家と
し三毒を食として三悪道の
苦を受こと自業自得の道理也
然はみつから一念発心せずより
外ハ三世諸仏の慈悲も及ハ
さるところなり

八月中旬より病悩弥増氣して
臨終ちかつき給訪に人も来り書札
などありけれハ他阿弥陀仏計て
返事せらるへし今ハ念仏の外
他事あるへからすとて其後ハ人に
対面ある事なかりけり同廿二
日聖とこ爪のいたきかと思たれは
神の結縁に来給てつみしらせさせ
給けるよといハれけるを人心得ずして
不審をのこしけるに其日は西宮の
祭にて神輿輪田御崎へミゆき
成給けるに上人臨終近付給よし
聞けれハ神主今一度最後の見
参に入らむとて神輿を離奉て
かくなむまうてたるよし申入け
れは聖の詞に符合しける間不
思議の思を成して大明神の
入らせ給たるにこそとて此由申たり
けるに上人見参ありて十念授
給神主今生の面拜只今許なり
とて落涙す念仏の外余言
なしとくくといハれけれハ泣立
出ぬ已に臨終近付給とて諸人群
集しけるに今日にてハあるまし
夜に入て終へきよしいひ出され
けれハ人々すこししつまりにけり
さて夜漸あけて同廿三日辰の
始晨朝の阿弥陀経のおはるとひと
しく禪定に入か如くして往生し給

ぬ諸人更に是をしらす念仏結
願の後他阿弥陀仏阿弥陀経を
はしめ給ける時こそハや御臨終と
しりて声々になきかなしみけれ
于時春秋五十一嗚呼禪容去
ていつくにかあるたゞ思を西刹
蓮台の夕の雲にかく慈訓とゞ
まりてやむ時なし屢涙を東城
草庵の暁の露にそふさても
兼ての給しハ我臨終のち身
をなぐるもの有へし安心さた
まりなハなにとあらむも相違あ
るへからすといへとも我執尽すして
はしかるへからさる事也受かたき
仏道の人身を空く捨むこと
あるましき事なりとて落涙し
給しにたかハす時衆并に結縁衆の
中に前の海に身をなぐるもの六人也
身命を捨て知識をしたふ心さし
半座の契同生の縁豈空からむや
とをく釈尊化縁尽て無余円
寂に歸し給し時を思やれ八十地
究竟の菩薩も涙を袖の上に流し
三明漏尽の羅漢も魂を胸の中に
消す賢聖猶しかり況や凡夫をや
緑松風すさましくして夜の声
沙羅双樹の悲を伝へ蒼海月
明にして暁の浪拔提金河の愁
を摸す仏日已に隠て闇にまよひ
法燈永消て道を失へることし
各南浮の再会空く隔りぬれハ
たかひに西刹の同生を契ハかりにて
こゝかしこになきかなしミけるあり
さま詞の林をたつね筆の海を
酌てもいひつくしかたく
こそ侍りけれ

(巻第五)

第一段

さて遺弟等知識にをくれ奉ぬる
上ハ速に念仏して臨終すへし
とて丹生山へ分入ぬ林下に草

の枕をむすひ叢辺に苔の庭を
儲て夕の雲に臥暁の露に

おきてハ只上人恋慕の涙をのミ
そなかしけるかくて山をこえ谷
を隔て或所に寺あり仏閣零落
して蘿苔礎をうつみ寺院破壊
して荆棘路を塞く此所にて暫
念仏しけるにいやしき樵夫も供
養をのへいとけなき牧童の発心
するもあり又此山の麓粟川と
いふ所の領主なる人詣て念仏
うけ奉らむとと申けるを他阿弥陀
仏曰聖ハ已に臨終し給ぬ我等は
未利益衆生に向たらハこそと仰られ
けるをか様に縁を結奉へきものゝ
侍うへは只給らむと頻に所望しける
間始て念仏の算を給ぬ此堂を
極楽浄土寺といひける所から不思議
にそ侍るさてかくのこたく化導あり
ぬへからむにハいたつらに死ても何の詮か
あるへき故聖の金言も耳の底に
留侍れハ化度利生し給にこそとて
他阿弥陀仏を知識として立出にけり
此聖ハ眼に重瞳浮て織芥の隔なく
面に柔和を備て慈悲の色深し
応供の徳至て村里盛なる市を
成し利益をのつからほとこして国土
あまねく帰伏するありさま誠に権
化の人ならてハかゝる不思議ハあり
かたかるへきにや

第二段

正応三年夏機縁に任て越前
国府へ入給に当国惣社より召請有
ける間七日参籠して今南東と
いふ所へ立給へきにて侍けるに神殿
に哥あり

あすよりハ誰にとハましのりの道
ゆふしてかけてやらしと思
御宝殿の中なとへハたやすく人の
よる事も侍らぬにかゝる不思議の
侍るハ疑なく権現の示給にこそとて

神主頼基披露し侍けりさて聖ハ
今南東へ移給けるに国府の在家
人或時霊夢をみる権現と覺させ
給て束帯たゝしき人の二三十
人許社頭を出給を夢心地に是ハ
聖の迎に出させ給と覺て夢覺に
けり其後幾程なくて彼所の直人
等請し奉る間参詣給神慮もさこそ
納受あるらめと夢想の告思あハせ
られて貴そ侍へる

第三段

其後佐々生瓜生などいふ所に修
行して念仏勸給程に夏過ぎ
秋暮ぬれハ玄冬漸迫来て深雪
路をうつみ青陽已に隣をしめて
寒風梢を払程なるに又惣社より
召請しける間其歳の別時ハ彼社
壇にして修せられけり焼香匂絶されハ
沈麝薫を讓て煙松壩に芬郁し
供華粧鮮なれば曼陀餠をうつし
て風廟堂に繽紛たりさて神主ハ
正面にして七日の間結縁し侍に
明神と覺させ給て長二尺ハかりなる
小冠束帯たゝしくして神主か左右の
肩をふみて立給へり諸人まのあたり
是を拝す上人を加護し法味を
喰受し給よと有かたく貴そ侍る凡毎
年歳末七日夜の間ハ暁ことに水を
あみ一食定齋にて在家出家を
いはす常座合掌して一向称名の
行間断なく番張を定て時香一二
寸をすくさ面々に臨終の儀式を
表せられける八月日むなしくうつり
きて露の命もきゆることハりの
至極する所を行しあらハされける
なるへしいと哀にそ聞侍る

別時結願のゝち
のとかなる水にハ色もなきものを
風のすかたや浪とみゆらむ
をハリまつ心は声にいてにけり
口に仏の名こそきこゆれ

第四段

同四年八月加賀国今湊と云所

にて小山律師なにかしとかやいへる人
僮僕あまた引具して道場へまうてぬ

此人ハ罪業を恐す悪事に憚らず

破戒無慚にして邪見放逸也いかゝ

ふるまハむすらむと諸人目もあやに

思あへるに日來の気色にはいとかハりて

詞も出さゝりけれハこハいかにとみえけるに

中食のおりふしなりけれハ飯を持って

あの御房これなれといハれけるを畏

恐たる躰にて請取てくいたりけるそ

はしめなりける十念うけ法門聴聞

して後ハ悪行悉くとゝめて一向專修の

行者となりけるかとハひ已にたけて

所勞つき侍ぬ明医湯薬をほと

こせとも生死の業病ハいやしかた

從類筋力をつくせとも無常の

殺鬼ハふせきかたしつゝに臨終正

念にして往生の素懷をそ遂にける

紅蓮の冬の氷ハ心水より結といへとも

名号の智火これを消し劍樹の秋

の霜ハ罪根よりつもるといへとも

撰取の光明これを滅すかくの如の

たくひ聖の教化に預て往生しける

人其数をしらすとそ

或人の返事に

なもあみた仏の身とは極樂の

はちすの花の開てそなる

第五段

さて藤塚といふ所に暫逗留あ

りて立給はむとしける其日の

夕より雲くもり風あらけて雨夜も

すからふりて朝ハ空さりけなく晴に

けれハ宮腰へ越給に小河といふ名

のミして岩高く瀬早き大河あり

水の面をひたゝしくまさりてかちよりハ

こゆへうもあらぬけしき也疥癩の

たくひ種々の方便をめくらし

旅人をわたさむとしけるに其辺の

住人等又船をかまへて我わたさむと

いひあらそふ程に旅人等兩岸にそ

いたつらにたてりけるさて一方より

聖を渡し奉らむといひけるに聖曰

諍未しつまらさらむにハわたさるへきに

あらずこゝにて又日をくらすへき

にもあらねは是こそ最後にて侍らめ

とて聖の腰に繩をつけて道俗時

衆をの／＼取つきてそわたりける上人

を始て同音に念仏する声雲に

ひゝき浪にとゝろくハかり也而に青

天高く晴て紫雲なゝめに聳けり

不動尊多門天碧落の雲に透

て蒼溟の浪にうつろひ給とみえし

程に洪水速に浅瀬に成てやすらか

にそ渡付給にける即藤塚石立など

いふ所々の人多く耳目を驚かしける

となむ昔仁寿年中智証大師

入唐の時龍頭の舟を艤ひ鼈波に

纜をときて万里の煙浪を凌給

しに暴風にはなたれてはから

さるに流球国にうちよせられ給へり

異類むらかり集て同朋伴侶忽に

あやまたれなんとす爰和尚蜜印に

住して懇祈をこらし給によりて黄

色の明王白髮の老人（新羅大明神）船の舳に

現して悪風をとゝむとみえたり彼ハ上

古の事なれはいふに及ハす代すゑに

くたりてかゝる奇瑞を頭給こと有かた

くそおほえ侍る

或時結給頌曰

願力道不嫌余念 西方信無有雜乱

名号外無求臨終 称念内即遂往生

心無所住而生其心を

またてみるすかたハかりや有明の

月にわかれぬなこりなるへき

又よみ給ける

山のハにこゝろの月を

さきたてゝ老のすかた

そ

にしに

かたふく

(巻第六)

第一段

或所にて聖道門の学匠として
聖の化導に難を加けるハ円頓
速疾の妙行は実相開会の真又
他力本願の称名ハ爾前方便の権
教也豈伽耶を離て寂光あらんや
何穢土を厭て淨刹を願へき方
便と真実と比較に及ハすと申ければ
聖曰一代半滿の教法ハ三乘漸
頓の根機其益を蒙ことをいて論
せず但機教時そむけハ修しかたく
入難しといへり今往生淨土の教門は
正為凡夫を面として愚薄底下の
衆生を隔事なく五逆闡提の我
等を簡されハ六八の弘誓を仰き
果地の仏智に帰命して三世を南

無の当念にきる淨土故にとして願へき
所もあり煩惱として断すへき謂も
ありされハ凡を捨て聖を期し身
心の迷暗を領解し沈淪の苦器を
悲て無有出離之縁の心の底をあり
のまゝに知て機の功を用ることなく
他力易往の淨刹に生せんと思て
口を開南無阿弥陀仏と唱る許也
故に妙宗抄云非厭離者捨此無期
非欣求者生彼無道自始初心終
至等覺變易未尽厭欣難忘文
然則淨土を求め穢土を厭ひ凡聖
の差別を置て機方を論すれハ
尤隔歴ともいひ方便ともいひつへし
但其機の所歸をいへハ遇仏超越の
導師智斷具足の果徳也師と位
ことなれハ十地等覺の伺へきに非ず
三乘淺智のはかるへき事なければ唯
仏一人究竟無生といへり自囑分の
妙解ハ面々にゆるすへしといへとも仏智
果海の証ハ遙に隔るをや初地の菩
薩猶二地の菩薩の举足下足をしら
さるかことし而十劫正覺の昔平
等の慈悲を催されて十方衆生を隔

なくいるに諸仏擯奇の凡夫を
もて可発とし給故に貪瞋具足
妄愛の心の底に纏に一念歸命
する時身心我にあらず弥陀と一致に
成ぬれハ彼此三業の謂成して行往
座臥即弥陀の四威儀也仏と衆
生と成かへり迷も悟も二なき者也
されハ法照禪師ハ欲識西方求淨
土会是塵中不染塵ともいひ念
即無念仏不二門声即無声第
一義ともいへり此上ハ終日に念仏するも
即無念の功能を具し終夜生を願も
即無生の益を得れハ見生の火自
然に滅する称名の力なれハ情をもて
修入する事今の教の不思議に
あらずや身ハ芭蕉泡沫に似たり命ハ
電光朝露の如し須臾に生滅し
刹那に離散す何そ今の一念より
外に命を遠く持て未來を期すへき
唯恒願一切臨終時と心得て南無
阿弥陀仏と唱て後念の心を用さる
なり古人云寸陰可惜時不待人と
此言実哉我等か本自己の心に
如々含識を兼て塵々法界を隔
事なけれども客塵煩惱に障尋せ
られて自他彼此の情量を分別す
此故に聖教量をもて法門をいふと
菩提心の上に仏法を談すると心大に
かハれるもの也是以般舟讚云口説事
空心行怨是非人我如山岳如此之
人不可近々即輪廻長劫苦といへり
名利身を養ひ恩愛心をなやまし
なから清淨の法体をいて相応
し侍らむや天台釈にハ此法ハ高妙
なる者にハ高妙なれとも卑劣の者
には卑劣なるへしとみえたり宗家ハ
若導此同諸仏国何因六道同
生死と尺給へり道念なくしての覺
法門仏知見こそハつかしけれなど返答
ありけれハ理を得けるにや淨土門に
入にけるとそ又或僧念仏に難を
加て我こそいき仏なれわか如くあ

れといふよし人の申けれハ

聖

夢の内に夢こそなければとろかぬ
心ハいかて夢としるへき

仏そと名のるハあやし仏には

仏とおもふ心あるかは

いきなから仏の道ハなきものを

南無阿弥陀仏の声に生よ

第二段

同五年秋の比或人召請し奉

ける間又越前国惣社へ参詣

あり國中の帰依尊卑首を傾

すといふことなし而に平泉寺法師

等偏執して國中を追出すへしと

て数百人の勢を引率して符

中へ赴よし粗聞へけれハ結縁衆

等申て云左右なく押寄て狼藉を

致さむにをきてハ互に雌雄を決

すへきよし各憤り侍けるを聖諫曰

此事にをいて聊喧嘩をも引出

し給ハ永く師弟の契約を変す

へし在家の人をこそ引導すへ

き身なれ在家にたすけらるへき

謂れ侍らす本より衆生にあたへぬる身

命なれハ善悪につけて他に任する

上ハ今更打ころされしと思へきに非す

六道四生廿五有に流転する事は

たゝ身命を惜し故也然は煩惱

具足の依体を打損せられハ無始以

来の敵をとりすましたるなるへし

努々憤給へからす又日来申つる

法門只今行しあらハしてみせ奉らむ

なと再三いさめられければ知識の命

をそむかん事を恐て掌を合て

念仏する程に衆徒等是非をいはす

社壇をうちかこみて時をつくり廻廊

の中へ責入て飛礫を打事しけ

きあめのことく也けれとも時衆一人にも

あたらずかくて半時許にも成ぬらむ

と思程に念仏の声も絶す合掌の

手もみたれさりけれハ衆徒等力をよ

はず帰けるか又儀して云詮するところ
聖を取ていたせとて重て打入つゝ

求奉るに肩をゝさへ膝をふみて

過る族もありけれともつゐにミつけ

奉らすしてむなしく引退て神主か

もとへ使者を立て此聖宮中を

追出せすハ神宝をふり罪科に

処すへきよしいひつかはし侍り

とて神主歎申けれハさてハいとや

すきこと也とて其夜亥剋ハかりに社

家を立出て加州へおもむき給に

けり不惜身命のことハりをまのあた

り行しあらハされける事貴そ

おほえ侍る

第三段

永仁五年の比上野国を修行

ありけるに或所にて武勇を業

とするをのこ一人来て時衆に

入るへきよしいひけれハ聖曰出家者

亡身捨命断欲帰真心若金

剛等同円鏡怖求仏地即弘益

自他若非絶離羣塵此徳無由

可証和尚釈し給たれハ先能々道

心発て後の計なるへし頭をそるものハ

千万あれとも心をそる者ハ一両も侍

らす在家者貪求五欲相統是常

縦発清心猶如画水とみえたり超

世の悲願ハ本より有智無智を論せず

在家出家をいハすひとしく往生すへき

願なれハ必ずしも家を出て山林に跡を

隠し身をすてゝ幽閑のすまひせよ

とはいかゝ勸侍へき只いつくにも念

仏たに申給ハそれそ往生の業にて侍へき

中く出家して戒を持貴けに成ぬ

れハいかにも機の徳か面と成程に仏

をも憑ます他力にも帰せずして往

生をとけぬ事の多侍也凡法師も

尼も此身の為に同道する事侍らす

念仏を申て昼夜に踊るも故聖

踊躍歡喜の余にをのつから行し始

給たりしかハ今も其跡をたかふへから

雲ハくもにハさハラさりけり

第四段

同年六月下野国小山新善光

寺の如来堂に暫逗留ありけるに

瑞華ふり紫雲たなひきて耳目

を驚しけれハ万人奇特の事に申

あへりけるに或僧のもとより書て

をくりける

夫正仏法のをきて空花ハある

に似たれとも体ハなし唯是目の病の

故によしなく大虚を花とみるなり

青赤目にある時ハ千花乱空す

金罽膜を去時ハ一空寂静也并に

藕の糸とみる事うちやる詩の詞にも遊絲

繚乱碧羅天といふ歟忝く一向淨心の

御念仏をよそより妄見をもて異見異

解を生ずる歟是全く偏執我々の思に

非を仏知見の推ところ自他其情を截

断して御行化を正に歸し奉らむと也

必一句を示給は結縁の資糧に備

むと請ふ

おほ空に花ちりまよひあそふいとゝ

みるハみたりの心なるへし

一すちにのりハやめたるこゝろ駒

空にみたるゝいとやつなかむ

花もみすいともみたれぬこゝろをハ

をのれなりとやいふへかるらん

返事 聖

大空ハもとより花も糸もなし

むねのはちすや乱ちるらむ

心こまのりハやめたる一すちや

いとゝなりてもつなきとむへき

花もみすいともみたれぬ心にハ

わきてをのれとなにをかハしる

一翳眼にあれば千華乱れちるといへる

目の病によりて虚空を花とみる誠体

相都無の妄見也但鷲峯演説の

筵鶴林泥洹の砌にハ諸天悉花を

散しき又聖徳太子勝鬘經を講し給

しかハ妙華一夜の間にふりつもりき此も

目の病によりて空花をみるといふへきか

すと思許也行住坐臥時処諸縁を

嫌ハねハ只念仏こそ詮なれ此時衆に

入者ハ今身より未來際を尽して

身命を知識に譲り此衆中にて永く

命をほろほすへし若此下をも出て

制戒をも破らハ今生にてハ白癩黒

癩と成て後生にハ阿弥陀仏の四十

八願にもれ三惡道に墮て永く浮

へからすと誓をなし金を打て入とい

へとも無道心の輩ありて制戒をも

破ぬれハ逆罪の者と成て三世諸仏

の舌をきり二世の願望を空くす

誠に曠劫の流転ハ併此身命を扶

持せる故也をのつから世を遁身を捨る

者も六賊に随逐して法財を失

五欲に貪著して諸惡をたくハふ是ハ

力なき凡界のふるき習なれハ我と制

断する事叶かたき間いきながら死して

身命を知識に譲り心の所望を叶

へすして永用事を尽す我を我に

せされハ居を他所にうつさす心を心と

用されハ思を万事に叶へす是則

他力に帰する至極をあらハし三心を事

相に振舞へる色也かゝる甚深の謂ある

間おほろけの発心ならてハ叶難に

よりて時衆に入事をゆるし侍らす

出家してつらなる中にも心ハ道場に

住せぬ者も侍らむ在家の人の信心

あるこそ身ハ聚落にありといへとも

心ハ道場に住したる謂にて侍れと

の給ハせけれハことハりを得けるにや出

家ハ思とゝまりにけりさて家に帰て

後ハ一すちに念仏して殊勝の往

生をとけゝるとそきこえし

二河白道の心とて

火と水と浪とほのほをわけてよふ

ちかひの舟そ南無阿弥陀仏

玄義の心

山のハにほのめく月をまつ程そ

木の下やみハさもあらハあれ

煩惱即菩提

わきてみる月そひかりハてりくもる

ことさら称名行者の前に紫雲瑞花
を見事尤故あり阿弥陀仏因位に願を
發給し時妙花をふらし音楽を奏せ
し是則十方衆生の往生決定する願
体剋果の瑞相也別願の正覚ハ凡夫
の称名より成し衆生の往生ハ弥陀の正
覚に定畢依之衆生称念の今と本願
成就の昔と全二なし然者一念即十劫
十劫即一念也又をのつから信心より感して
加様の靈異をみる時娑婆の著心を翻
て浄土の勝相に思をかくる若是仏智
の方便歟凡夫の度量するところに
あらざるものなり

第五段

或人恩愛ハ身を損する敵財宝は
心をなやます毒としりなから厭ハさるハ
仏法にあへる其かひなく覺侍よし歎申
けれハ書てつかハされける
妻子財宝ハ身心をなやます敵そと
しりぬれハ心に厭捨らるゝ上著せらるれハ
信心得られてうとまるゝ間今生より思
捨たる謂にてこそ侍れ而に今生にてハ叶
かたきとハ心得られぬ事也今生より外に
後生なし今の念仏より外に又臨終あるへ
からす此領解立ぬる行者ハ今生後生
臨終平生二なくして心も安穩になり
此上に厭離穢土の心も欣求浄土の心も
善心も悪心も隙なけれども南無阿弥陀仏と
唱ていつれをも用ゐされハ臨終の一
念に往生疑なきもの也
越後国木津入道といふ人物語の
次に世間の風俗ハいとハしく覺へ山
家の幽居ハ気味ふかくのミ侍る此
心ハいかゝ侍へきと申けれハ書てあたへ
られける

榮華貪名利故 後生必墮惡道
隱遁離欲染故 当來速証仏果

(卷第七)

第一段

同六年武州村岡にて所勞付て

臨終し給へかりける時々衆のために
書給教誡云

他阿弥陀仏同行用心大綱

厭離草庵 不惜露命 守出家人
不歸在家 不輕神明 歸敬三宝
恒墮地獄 誓永不破 信人為伴
謗人不背 道理任他 僻事領納
命輕如塵 不延臨終 称名憑生
心有深信 身礼敬仏 口常念仏
付出家機念仏行者本願唯

南無阿弥陀仏

或人三業の外の念仏とて心を
離よと教化し給心えられす松嶋の
見仏上人の哥にも

心より外にハ法の舟もなし

しらねハしつミしれハうかひぬ
とこそ侍れと申けれハ

聖

心より外にそ法の船ハある

しらぬもしつむしるもうかハす

第二段

越中国放生津にて南条九郎と云

ける人詣て申云御房の念仏すゝめて
あまねく人に往生とけさしめ給と申ハ我
等かやうなる罪人をも仏になし給へきかと
申けれハ人によるへきに非す本願に歸
して念仏申給ハ疑やハ有へきとの給
けれハいさとよ貴人の仰られしハ正く
仏に成事ハおほろけにてハかなひかたき
よしのたまひきいかゝあらむすらんと申けるを
誠末世の根機造惡の凡夫出離にを
きてハたゝ弥陀一仏の大悲本願に乗せ
すより外ハ大方叶へからす依之阿弥陀
仏の法蔵菩薩たりし時誓曰若我成
仏せむに十方衆生我名号を称して下
十声に至らむに若生すといハゝ正覚をとら
しと彼仏今現に成仏給へり知へし本誓
重く悲願空しからす名字を称せんもの
必往生すへしといふことを誰も煩惱の
こきうすきをいハす罪障の軽き重を
論せず只口に南無阿弥陀仏と唱れば

声即往生也中く才学立る人ハ教訓
にかゝらぬ方もありをの／＼のやうなる
重代の武士の命をかるくもち給へるか
往生ハやすくとけ給へき也としめされけれハ
さては往生の謂ハ心え侍ぬいかなる妄念の
上にも名号を唱て往生ハ仏に任奉へき
かと答けれハ善悪に付て心を用さるを
他力の念仏とハ申也といはれけれハ此人二
心なき念仏者に成けるとかや

或時よみ給

小車のわつかに人とめぐりき
心をやれハ三のふるみち
いく瀬にもなかれてきゆる山河の
あハれハかなき老の浪かな
身をおもふ人の心のやみちこそ
くらきよりなをくらきに入れ

第三段

越後国池のなにかしとかやいふ人年
比密教に心をかけ舍利に信を発て
すくしけるか宿習内に薫し往縁外に
熟しけるにや聖に対面して今度の
出離にをきてハ他力本願に乗せずより
外ハかなひかたきことハりに思成て真の
知識に逢奉ぬる事を喜侍けるか聖
より十念を勧められ奉よし夢想にみて
後念仏往生の安心にもとつきて弥信心を
致けるに風氣相侵て且暮期しかたし
福祿年積て雪のはたへ漸衰へ心神
例に背て露の命消なむとす生前の
対面ハ夢後の利益に覺て聖の
おはする所へまうてゝ見参に入て帰ける
後所勞ことさら増氣す聊まところミたり
けるに聖の弟子たちあまた来て十
念勧め看病すと覺けれハ汗なかれ出て
病惱悉平愈してけりいと不思議
なりける事にや此人つゝに臨終し
けるにめてたく往生を遂けると南

第四段

同国鶴河庄萩崎極楽寺に僧あり
契範円觀房とそいひける住山の昔より

隠居の今に至まで修学年をかさね練
行日積れり九枝灯尽ぬれハ窓の螢
を集て学をたしなみ八旬齡闌たれハ
眉に霜を垂て觀をこらす而に聖柏崎
に逗留のよし伝聞て帰依の志ありける
間已に道場へ参詣すへきよし申を數輩
の門弟等諫て云貴辺ハさすか国中の
碩学無双の能化にておハしますにかゝる
捨聖のもとへおハして法談などあらハ人も
浅々しくや思侍らんと云けるを此聖ハ數
百人の徒衆を引ゐて利益遍くおハし
ませハ定て行徳もおハすらむ予相伝の
深義已証の法門委く尋申さむに答
たかへ給ハすハ速に知識とたのミ奉へし若
御房たち所存に違て思給ハゝ永く師弟の
札有へからすといひける間弟子等力及ハす
相伴て道場に至にけりさて聖に見参して
法門尋奉けるに自宗の奥義を極め
觀道の得解をあきらむるのミに非す
他力本願の安心にもとつきてなめならず
恭敬しける間弟子共の中にもあまた
時衆に入けるとかや此人幾程なくて終ける
に殊勝の往生を遂けるとなむ

第五段

さて越後国符より関の山熊坂に懸て
信州へ趣給山路に日暮ぬれハ苔を払て
露に臥す交語ものハ樵歌牧笛の声
澗戸に天明あくれハ梢を分て雲をふむ眼に
遮ものハ竹煙松霧の色凡視聴に
ふるゝ所厭離の思をすゝめ欣求の心を
催さすと云事なしかくて善光寺に詣
給たれハ式日の外ハまれにも勤られさる
舍利会臨時にをこなはれて御戸開かれ
たり是併如来の慈悲方便にてこそ
ましますらめとて寺家より日中の行法ハ
礼堂にて有へきよし申請られけれハ如来
前にして勤給へり昔より未かゝる例なしとて
万人首をそ傾ける此如来ハ天竺の靈
仏として日域の本尊と成給へり酬因の
来迎を示して影向を東土の境にたれ
有縁の帰依を顕て靈場を信州の中に

しめ給一光三尊の形像如来の密意を表し決定往生の勝地他方の淨刹に超たり今宿縁あさからさるによりて逢奉ことをえたりとて七日參籠有けるに

日中の念仏ハ毎日に御前の舞台にして勤られけり彼聖德太子用明天皇の御為に七日御念仏あるよし如来へ啓し給ける其詞曰

七日称揚功德已 斯此為報広大恩
仰願本師弥陀尊 助我濟度常護念

如来御返報云

一念称揚無思留 何況七日大功德
我待衆生心無隙 汝能濟度豈不護
とそあそハされたりける今七日の參籠も思合られていと哀に覺侍り

第六段

甲斐国一条のなにかしとかや云人尋申て云本二百数珠にて侍し時ハ時刻ハみしかく数ハ多く此百人にてハ時刻ハ久数ハすくなく侍り本の数返のこく侍へきか数はすくなくとも時分の久きにつき侍へきかと申たりけるに
数返ハ数返の為に非す相続のため
相続ハ相続の為に非す臨終一念の為
臨終一念ハ臨終一念の為に非す往生のため臨終一念の往生ハ南無阿弥陀仏
同国中河といふ所にて或人聖に副奉る程ハ念仏の安心も心得侍る様なれとも立離奉れハ法門の理りも念仏の用心もち忘侍れハ聊し給らむと申けるに書てあたへられける
往生極楽の直道ハ弘願称名の一行也
而水上の泡草の葉の露よりもあたにはかなき身のために消やすくかりそめなる命をなかく思成して妻子財宝の愛念妄執に深貪着し永餓鬼々
畜のすかたと成て苦をうく此心の為にたくはふる所の所領財色によりて煩出来れハ心に背時ハ是非なく怨敵の憤をむすひ放逸邪見の業行を造て
多生曠劫八寒八熱の炎にむせひ

氷に閉られて永く浮かたしまれに供布施僧の営をなし堂舎塔婆をたてゝも
名聞利養の心を発て修羅鬪諍の

業となす又五戒十戒を持て身口ハかりハまもるといへとも意地乱ぬれハ人天有漏の果福となりて大乘無作の戒体に非す然間衆生の心行より希にも三界六道を出る便なし適出家発心して山野村里に身命を捨て修行すといへとも風雨寒熱に堪す衣食の為にわつらふ間本の業因に立還て三宝仏陀を背き破戒無

慚のとかをうく或ハ遁世と名付て閑居に菴をむすひ心静に念仏すといへとも若命なからふれハ徒然に堪すたえたる人も心のとかなるをよろこぶ程に終焉命断の刻苦痛をうくる時心顛倒すれハ所存違て念仏するにあたはず空く死して往生の本意を失ふ悲哉まれに念仏の知識に逢といへとも或ハ戒行を全してこそといひ或ハ無念にして唱よと示し或ハ極楽に心をかけすハ叶へからすとすゝむ然間三業四威儀善悪の心振舞に留て阿弥陀仏の本願にも背き善導和尚の疏尺にも違て近來念仏すといへとも誠に往生の本望とくる人まれ也所詮往生決定の念仏の行者ハ在家出家をもちハす智者愚者にもよらず善人悪人をも擇ハす心の乱不乱をも論せず老少不定の命なれハ且暮知かたし三界火宅難居止乘仏願力往西方と心得て死の縁□なれハ何そ只今の臨終をのへんや凡夫の心ハつたなけれハ誠に今しぬへしとは覺すとも出る息入をまたされハ行往坐臥時処諸縁の間に必しぬることハりの至極する上ハ在家ハ在家ながら出家ハ出家ながら智者ハ智者ながら愚者ハ愚者ながら善人ハ善人ながら悪人ハ悪人ながら心の乱れむ時ものとかならむ時も極楽の念せられむ時も念せられさらむ時も病中にも平生にも善心の上にも悪心の上にもたゝ称名の声を往生と信して南無阿弥陀仏と唱て露の命尽ぬれハ名号の内より必仏の来迎も

極樂浄土も顯るへき也南無阿弥陀仏

中河におハしけるとき

聖

行す多も今もむかしもむなしとも
いひつくすへきことのハもなし
身をおもふ心のなかをたかハすは
身には心そあたとなるへき
なけきなき心を身にハもとむとて
身のくるしめハ歎とそなる
身のためによしなく物をおもふかな
人めをつゝみしのふ心ハ
をしふるにしらぬかたハ法のみち
仏の智慧にをよひかたくて
をしへぬにしらぬわきハ六の道に
立かへるへきこゝろふるまひ
よしあしのことの葉ことにをく露の
命のきゆる御名の一声
浮かたき心をしれハもらさしと
ちかふ仏のみなそうれしき

(巻第八)

第一段

同国小笠原と云所におハしける時日蓮
か門弟等念仏無謂とて道場へ
乱入て云一代の教法には法花をもて
本懐とし五時の配立にハ妙法をあけて
醍醐にたとふ而前権門の念仏を
もて正因正行と名付速疾頓成の
妙宗をもて雑修雜行と下す誹謗大
乗のとか遁るゝ所なし仍今祖師と号する
善導法然等無間に随在す先祖猶
しかり況末資をやといひて事を法
門に寄て狼藉を引出へき気色みえ
ける間委細の返答に及ハす善導
法然地獄に墮らるゝ由の事さも侍
らむ如溺水之人急須救といへり地獄に
入て勤苦の衆生を助くるハこれ大悲
闡提の誓なりと答給に全利生の
為に非す大乘誹謗の故也と重て
難る間汝誹謗の罪によりて墮らるゝ
と心得たらむによりて彼人地獄に墮
すへきに非す墮たりと心えたらハ汝か

心の中の善導法然ハさこそあるらめと
の給けれハ是非をいはすへからすとて
押寄る処に在家人あまた立ふさかる
中に常はのなにかしとかやいふ者すゝみ
出て云在々所々の利益これにかきる
へからす遺恨あらハいつくにても謝し奉
へしさうなくこゝにて狼藉を致さハ
一身の恥辱万人の嘲哂也適逢
かたき知識に逢事を得たり名聞利
養の昔ハ心ハ恩の為につかハれ命ハ義
に依て軽かりき欣求浄土の今ハ心を本
願に懸て命を知識に奉るといひし
るふ程に刃をましへほこさきをあらそふ
へかりける間聖両方の中へ分入て云
仏法といふハ互に自他を忘れ人我を
離て談する事也各のけしきあしく
みえ侍り不審相のこらハ後日に來給へ
今日ハ速に帰らるへしとうちわらひての
給けれハ偏執をたおし慢心とらけるにや
日蓮か門弟等引退て事故なくしつ
まりにけり若雌雄を決し是非を
あらそハましハゆゝしき人の大事
ならましを身命を顧ミすなためられけ
れハにや殊なる子細もなくしつまりにけり
いと不思議なりけることにそ

第二段

同国板垣入道といふ人聖ニ対面有
けるに念仏の法門領解して当国
修行の間ハ常に値遇し奉けりさて
國中利益の後御坂にかゝりて相州へ
趣給此山は名を得たる嶮路余に超
たる難所也青巖峯遠して雲旅人の
衣を埋ミ白霧山深して露行客の
袖を濡す而に彼人年齢已に傾て
首の霜を払ひむそちの坂をこえて
聖を送奉けむ懇志の至いと哀にこそ
侍れ聖いたはしくや思ハれけむ乗馬
すへき由度々の給せけれとも知
識の歩行にておハするにいかゝ馬にハ
乗へき年老衰へ侍れハ惜ともかひ
あるへき身にも非すたゝかちよりこそとて

其日ハ河口と云所まで着ぬ老耄の
身なれハ余年も幾ならず後会又其
期をしらす今生の面拜も是を限と
かなしみけるいと理にこそ侍れきて夜明
ければ立給にたもとに取付ておさなきものゝ
母をしたふか如く声をたてゝなきかなし
みけれハいかに心なきも袖をしほらぬ類は
なかりけるとそ家を出て世を通さらむ
程はかくても有へきならねハたゝいつ
くにも往生をとけ給ハむのミこそ本
意なるへけれとて子息ともあまた有て心
ならず取返しける間同生を華開の
朝に期し再会を終焉の夕に契奉
てなくく留ぬさて宿所に帰けれともいとく
心も身にそハす成行けれハ持仏堂に
入り聖の真影に向て涙を流しつゝ
会者定離ハ有為無常の境なれハ
歎ともかひあるへき身にも非すとく浄土に
まいりて不退の友となり奉らむとて
水食を留て一心に念仏す子息親
類とかくいさめけるをも用すして十一日を
へてつゝに往生をとけニけり或は合
戦鬪諍の禍にあひ或ハ恩愛離別
のかなしみにひかれて命をすて身を
ほろほす是皆輪廻の妄業にして
またく得脱の因縁にあらす是ハ出離
の要法を聞き往生の安心をあたへ
られ奉ぬる恩徳を思芳顔をした
ひて忽に思死にしける事ためし
すくなくこそ侍れ彼雪山童子の身を
なけ常啼菩薩の肝をさきシミナ
深位の大士法身の薩埵の化儀なれハ
申に及ハす末世の凡夫にきてハ
かゝる不思議有かたくこそ侍れ

ある時

うへもなき思やきえし富士のねの
けふりハ今ハめにもかゝらす
雲よりもたかく出たるふしのねの
月にへたゝるかけやなからむ

第三段

越後国波多岐庄中条七郎藏人と

いへる人正応六年の比聖に対面し
奉りて他力本願の謂念仏往生の安心
に本付て後分段生死の堺に心を
留す老少不定の理に思を懸て所
領財宝妻子眷属の愛執著心を
翻て唯後生菩提の営より外は他事
なかりけるか真の知識二逢奉て往生
とけ侍らむ事永劫を経とも争報謝し
奉へきとて感涙を流しけり其後出
家して浄阿弥陀仏となむいひけるか
所勞付侍けるに病中の間或ハ光明を
み或ハ音楽をきく化仏菩薩尋
声到一念傾心入宝蓮と唱て諸
の菩薩聖衆たちの影向しましく
けりとて落涙し侍けるにほそらかなる
光二筋浄阿弥陀仏か頂をてらす此時
掌を合て即紫雲たなひきて紫の
扉に立廻といふと讚を頌して一心に來
迎をまつ苦痛増氣する時は慈悲
加祐令心不乱とこそみえたれわか力
ならばこそいかなる苦痛ありともなとか
念仏の申されさるへきとて高声念仏
百返許申て息たえぬ于時靈光赫
奕として晴天にかゝやき異香芬
郁として内外に薰す骨をひろふ時
又紫瑞空にみえて音楽雲にきこゆ
骨ハ皆五色にして仏舍利の如し願力
かきりなければ正法末法時を扱事なく
機縁空からされハ在家出家人を
嫌事なし往生をとくる者多といへとも
けにかゝる靈異ハ有かたかるへきにや

第四段

越前国角鹿笥飯（近來異教 賀氣北）大神

宮ハ大日如来の垂跡仲哀天皇の
崇廟也天皇九年異国へ発向せん
とし給し時於長門国豊浦宮崩御
の間神功皇后懷妊たりなからつゝに
三韓を責平て帰朝の後皇后十
三年みつから神主となりて祭礼を始
行れてより以來一千余廻の星霜旧
たりといへとも七十余代の崇敬改事

(巻第九)

第一段

正安三年十月のころ伊勢国へ入給
同十一月の始に櫛田の赤御堂に

逗留ありけるか此次に太神宮へま

いるへきよしの給けるを凡当宮ハ僧

尼参詣の儀たやすからさる上如此遊

行多衆の聖宮中へ入給事いまた

其例なし且ハ若干の尼衆の中には

月水等のけかれあるへし又疥癩

人等つき従奉れり是又宮中へ入

事禁制ありかたハ憚有へしなと

申輩侍けれども追かへされん所まで

まいるへしとて疥癩のたくひをは

宮河の辺に留置て自余の僧尼

以下は皆引くして外宮へ詣給に敢

て制し奉る人なし依之中鳥居

までまいりて十念唱給宮居久

神さひたるけしき余社にすぐれ謁

仰を致し信心を催事他の神に

超たり昔天巖戸を閉給し時日月

光みえずして天下とこやみに成侍し

に天津兒屋根尊八百万の神達を

あつめて榊の枝をとり庭火をたきて

夜もすから神遊し給しにめてハあさ

くらかへしの時俄に巖戸を開給

けむいにしへ思出られて貴く面白そ

侍るかくて宮中出入の輩に念仏を

勸給に神人等此所の風俗として

かくのことくの儀いましめられ給へりとて

一人も受るものなし爰宮政所大夫

雅見と云者おりふし参宮して

下向しけるか聖の念仏を勸給御手

より金色の光其色あさやかにして

上へ一尺五六寸ハかり左右へ一尺七八

寸ハかりみえ給又おなしき手より五色

の瓔珞二尺ハかり玉を貫て動か如く

してたれたり時に雅見奇異の思

をなして幻といふハ加様の事にやと思

惟して瞠目を閉て又見開に猶

もとのことし此時掌を合せ膝を

嘔して十念をうけ奉る此後諸

なし北陸幽奇の祠壇を祐て華夷
静謐の官社に備ふ専異国征伐の
儀式をもて猶本朝鎮護の祭祀とす
夏昶秋嘗の礼欽仰年旧たり朝祈
夕賽の輩効驗日新なり靈異の甚
きこと得て称すへからさる者歎抑此地の
体たらく東に翠嶺の嵯峨たるあり
朝の日利生の光を耀し北に蒼海の
渺漫たるあり夜の月和光の影を移す
是以漁翁の釣をたるハ蒼浪万里の
雲を重てをのつから生者必滅のことハりを
かたとり遊女の棹をうつす煙波千重
の霧を隔て鎮に会者定離の悲を
頭す爰正安三年聖当社へ参詣有
けるに或人靈夢をみる社頭の後の
森に白鷺ハ鶯數をしらす群集す何
事そと傍の人に尋るに道を作らるへき
評定也云々加之当社前大祝兼盛瑞
夢の告を蒙によりて西門の道を造て
聖に踏み始させ奉らむと思侍りけれども
社家の一大事たやすく人力の及へきに
あらずとて歎なから年月を送よし聞給て
さてハやすき事にこそと仰られける間
社司神官等大に悦て先繩を引て
道のとほりをわりぬ広さ二帖余遠さ
三町余也さても其あたりハおひたハしき
沼なりけれハすへてうつむへき土の便も
なかりけるを聖社頭より四五町許行て
浜の沙をはこひ始給程に時衆の僧尼
我もハとあらそひける其外も諸国
帰依の人近隣結縁の輩貴賤を論
せず道俗をいハす神官社僧遊君
遊女に至まで七日夜の間ハ肩をきし
り踵をつけり海浜頗る人倫をなし
道路ますハ市の如し加之社頭を掃
除し宮中を崇敬して沙をちらし石を
たハましめ給大方玉を瑩鏡を懸たるか
如し聖の道徳に非ハ争かたやすく
此大功をなさむや此間靈異甚多
といへともしけきによりてこれをのせ
さるところなり

人悉く念仏をうけ奉けり又一禰
宜定行宮中の館にて聊居ながら
眠たりける夢の内に山田の上大路
を五体すきとおりに給へる阿弥陀如
来菩薩聖衆百体ハかり引烈て
黒衣の僧少々相交て中鳥居へ
とほり給とみて即驚て云いまいかなる
人か参宮し給つると尋ぬるにしかくの
聖こそ大勢にてとおりに給つれと答
るに信伏随喜して殊に帰依謁仰
す其日は法楽舎に宿せられけるに
宮人等美膳を調て供養し奉る
又次日内宮へ詣給御裳洗河に
浴水を用て漸社壇に赴給に
神風久しく伝て業塵をハラひ
靈水遠く流て心垢をきよむる
かとそ覺たるさて二鳥居にて
十念唱て下向し給に内宮一禰宜
申て云神の法楽人の結縁の為に
とて日中の礼讃を所望し侍けるに
社頭ハ其例なき間道のかたハラなる
芝の上にて例のことく一時念仏あり
聴聞の上下感涙を抑て信仰し
侍へり凡外用の仏法に敵する暫
魔王ニ順して国土を領せんかため
内証の利生を専にするつゝに群萌
をこしらへて仏界に入んことを欲
する者哉此事ハ雅見注進狀一
禰宜夢想記とて後日に神宮より
上人へ進せられけるとなむ

第二段

同四年春越前国敦賀に又日
数を送給に江州小野社神主実
信靈夢の告あるによりて書札を奉る
狀云去正月廿八日夜寅刻夢想に
当社御宝殿の正面の御戸をくし
ひらかれたるに金色の光明ありて内
外赫奕たり御殿の内よりけたかき
御声してのたまはく諸国修行の
念仏勧進の聖他阿弥陀仏ハ権
化の人なり汝彼上人を当社へ召

請せよわれ結縁すへしと示給問子
細を申入云々仍神託のうへハ速に
請に応すへきよし返事有て同三
月四日江州へ趣給ふ今は峯の淡雪も
残なき比なれとも猶風ハあらちの山かと
おほゆる所を過て海津の浜に付給
けるに迎に船を奉けれハやかて九日
立給昨日ハ北に吹今日ハ南にをくる
風帆の感応併神の威光をほと
こして上人を擁護し給けるにこそ
さて便宜なりければハ竹生嶋へ詣給崎
岸たかくそひけたる垂跡感徳の余に
超たる事をかたとり湖水深く湛たる
本地弘誓のあさからさる事を表する
者哉昔都良香此嶋へ詣給て

眺望の幽奇にたえす三千世界眼
前尽と詠して下句を案し煩けるに
神殿より十二因縁心中空とつけさ
せ給ける事思出られ侍へりこゝに常
住等聖の参詣を感歎して巖飛など
いふ水練してみせ奉りければ人々珍
きことにそ申あひけるかくて霞をわけ
浪を凌て朝妻につき給ぬ一宿を
経て小野社壇に参詣し給き当社ハ
称徳天皇御宇此所より靈光の瑞
ありて遙に王城をてらす仍勅使を
たてられて天平神護元年四月
中寅に大菩薩を奉勸請云々さて
十余日参籠の間靈夢以下の
奇特数をしらす其後羽田社に
おハしける時花ふり紫雲立しかハ
諸人随喜せすと云事なし小野
大菩薩聖を召請給よし風聞
せし程に国中の諸社より面々に
請奉りにけりいと不思議なりける
にや

或時

のかれぬと思ミ山のおくまでも
けにハうき世の外ならはこそ

第三段

同国小蔵律師なにかしとかやいふ

人聖に見参して念仏法門領解

して後或時往生浄土の用心聊注

給らむと申けれハ書てつかハされける

三界ハ衆苦の住処身即苦のある

しなり財宝ハ煩惱の所依心又欲

の源なり六道四生の枢を出すしてハ

争四苦八苦の家をはむ心を花

にとゝむれハ名残を木本にのこして

又こむ春をまつ輪廻こゝにたえず思

を月にかくれハ面かけに夜の雲を

厭てとゝまらぬ秋をおしむ妄愛弥

深し衆生輪廻の迷ハいつをか始

としいつをか終とせむ生を生の始と

せむとすれハ生の始にもまよひぬ死を

死の終とせむとすれハ死の終にも

くらし恩愛離別の歎の煙心の上に

おほへハ愁歎の炎肝をこかさすといふ

ことなく生死到来の悲の風病の床に

さはけハ無常の刀心をきらすといふ

事なし適穢土を厭離せむとすれハ

其体を執して其影を別むとするか

ことしいつくにてかこれを離へき山又

山の奥までもますく浄土を欣求せ

むとすれハ我身を忘れて我身をもと

むとするに似たりいつくにてか是を願得

む西猶西のさかひまでも身ハ水の上

の泡の浪に漂よりもたのミなく命ハ

空中の幻の目をましろかせハ空きか

如ししかし業障の身命を弥陀に廻向

して本願の名号を唱へむにハ称名

念仏の行者をハ六方恒沙の諸

仏も光をならへて護念し信心決定

の人をハ天魔波旬もいかりを翻し

て讚嘆すはやく一心に念仏して

畢命を期とすへし

(巻第十)

第一段

同じ八月十五日撰津国兵庫

嶋へつき給沙村かさなりて

ちまたをならへ河海たゝへて

派をさかふ錢塘三千の宿眼の

前にみるかことし范蠡五湖の

泊心のうちに思しらる治承の

ころ新都を立られし福原の

京とは此所なり翠華来らす

して歳月ひさしくつもりぬれハ

玉の蹙むなしき跡をのみ残て

瓦の松そのなこりさへなく成に

たり時うつりことあらたまる有様

無常の境をいとひ不退の土を

ねかふ便なるへしさて故上人の

御影堂に詣て瞻礼し給に平

生のすかたにたかハねハ在世の

昔思出られて懐旧の涙せき

あへす十念の間称名の声も

とゝこほり給程なれハ時衆の僧尼を

始として結縁の道俗に至まで

悲歎の涙たもとをうるほし

傷嗟の声耳にみてりさても今年ハ

上人十三廻の忌辰なり聖もと

より念仏弘通をさきとして

去留心に定めされハ機に随ひ縁に

趣て勧進し給程に其日を指て

必しも此所へと思給ハさりけるに

今月にしもをのつから廻付給へる

眞実報恩の心さし感応しけりとそ

の給ける自然流入薩婆若海

のことハりも思しられて貴覺侍り

同十七日より観音堂にて七日の

別時を始行し給結縁値遇の

道俗遠近親疎の往詣までも

各勇猛の志を一にして共に

慇懃の廻向をいたす其行儀の

次第昼夜十二時に結番して

一時に数十人の時衆を定む調声ハ

上人在世より聖一人つとめられけるを

正応六年武州村岡にして諸身

大事におハしける時人々いたはり申

けれハそれよりそ始て時衆の中に

勤侍けるしかるに参詣の人申云

行法ハいつもの御事と申ながら

これハ故上人御往生の年月にも

相当給へり道場も又昔にかハラぬ

跡なりとて頻にすゝめ申けれハ聖
調声を勤らる行業功つもり薫
修徳たけて弥信心を催す在世の
いにしへ今更思出給けるにやそゝ
ろに落涙し給けるをみ奉に心
なきも心あるも涙をなかし袖を
しほらぬたくひハなかりけるとそ
凡錚々たる金磬の響の中に
同心称名の声雲をうかち片々
たる香煙の薫する所に大衆踊
躍の行地もとゝろくハかり也天衆も
さためて影向をたれ地神も争隨
喜し給ハさらむと覚ゆ于時秋已に
半たけて夜虫うらみねんころに
風のをとやゝ身にシミて暁の露
たもとをうるほす蒼波漫々として
紺目四大海の觀こらさゝるに
をのつから心にうかふ青山峨々として
白毫五須弥の相思ハさるに猶
眼にさいきる緑松枝をましへて
宝樹檀林の粧をかり衆鳥汀に
たハふれて鳧鴛鴦の囀を
うつす奥津浪まにいさり火の影の
ほのめくにつけてハ苦海沈淪の
たくひをあハれミ入江の辺に秋の
月の白をみても聖衆俱会の
楽思やるすへて所を得たる
勤修おりにあへる行法事にふれて
信を催さすといふことなしこの時
聖よみ給ける

仮に胎藏の生を受て有縁の衆
生を度するか又しらす弘経の居士
暨穢土の報を感じて無量の
群類をすくふか抑如来在世にも
時所相応して法をとき給とそ経にも
みえて侍るしかれハ滅後の遺
弟報恩のつとめも時所相応して
感応あるへき趣此時思あハせら
るゝよし人々申あへりすへて
淨戒持律の僧侶より破戒無慚
の男女にいたるまで信力人の命を
かねず恭敬我心よりおこれり
清淨無漏の結縁なるへし最初
引接の悲願たのミある者歟

第二段

乾元々年秋のころ武州淺提と
いふ所におハしけるに又小野社
神主実信于時出家
法名願阿進状云去年九
月廿四日夜夢想云聖当社に
参詣し給て御宝殿の大床へ
のほり給に禰宜安重外陣の妻
戸の前に畳をしけり彼妻戸を
うしろにあてゝ坐給て十念唱給ふ
処に御正体一面上人の左の
袂に落かゝり給安重御殿の東の
妻戸より出て大床に倍て申云
御神体ハ一御箱を社の箱と点
してかの箱におさまりて道場の
守護神と成へしと誓給て上人の
袖にとひうつり給なりと申間彼御正
体を十二光の一箱に納奉ると
みて夢覺畢入取
要靈夢嚴重
なりといへとも自然に日月を送
処に今年九月八日夜寅時又
夢に願阿社参するに耆年の僧
一人現て云聖の行法他に異也
仏法の守護神と成て彼道場を
曜さむために嚴重に示す所也御
正体を今までかゝへ惜奉条心え
られすと云々此時身心恐怖して
夢覺了仍御正体一面八乙女の

絵一枚送進候先度の夢想に
まかせて一の御箱に可納給へしと
申侍間記文に任て納奉き昔
行教和尚金剛般若を講誦し
給しかハ宇佐八幡宮その信心の
堅固なる事を感じて本地の三
尊忽に袂に現給即彼御体を
石清水にうつし奉き今上人専
修正行の徳用をほとこし給小
野大菩薩其行化の真実なるに
応して垂跡の御体まさしく袖に
かゝり給仍御正体を十二光の箱に
納奉ぬ時代遙にへたゝれりといへ
とも感応の不思議これひとし
きもの歟

第三段

嘉元々年臘月恒例の別時ハ
相州当麻といふ所にて修せられ
けるにいつもの事なれハ貴賤
雨のことく参詣し道俗雲の如く
群集すさて念仏結願の後
卅日の暁元日の朝大衆に對て
法文の給事あり一切衆生曠劫
以来六趣に輪廻して或時ハ有
頂の煙霧に交て併有為の快
樂に愛着し或時ハ阿鼻の
湯火に咽て鎮に無間の懃苦に
梵焼すこの故に諸仏如来法
性真如の都を出て遙に結縁引
導の方便をめぐらし弥陀善逝ハ
安養淨刹の堺を越てまのあたり
来迎引接の本願を發給仏心
者大慈悲是以無縁慈摂諸
衆生といへり慈悲とは觀世音の
体なり觀音は娑婆至現の形也
今大悲闡提の願を發て濟度
衆生にむかふ我こそ觀音なれと
の給けるをめぐらしき事の給物
かなと人皆思あへりけるに下野国
小野寺のなにかしとかやいふ人の
もとより不思議の靈夢をミたり

とて記文を送れり其詞曰仏
子某去廿七日夜の暁夢に金色
の阿弥陀仏を拝す傍に菩薩
まします大勢至なり觀世音のみえ
給ハぬ間いかなるいハれにて侍やらむと
問奉るに仏のたまはく觀音をは
濟度利生のために娑婆へつかはす
其名を他阿弥陀仏と号す勢至
菩薩をもつかハしたりき一遍
房といひしか帰来れるなりとしめし
給云々<sup>〔記録及委細
恐繁取要〕</sup>聖の詞にやかて
符合しける間諸人弥調仰の
首を傾け道俗ますく随喜の涙を
そなかしける昔空也上人夢の
内に極樂へ詣給たりけるに中央に
むなしき華座ありき事の故を
衆会の聖衆にとひ奉り給ければ
此国の教主ハ阿弥陀仏と申す衆
生利益のために南閻浮提日本
国に出給へり其名をは八幡大菩と
号すとの給けれハ奇特の思骨
髓にとほりて夢さめ給けるよし或
旧記にみえたり加之律宗にハ好
想をミて受戒の得否をしり
真言にハ靈夢をえて悉地の感
応あらハすといへり異域にハ
漢明帝魯仲尼皆よるの夢を
もちひ紇里記王の十夢阿難
尊者の七夢をのく其まこと
なることをえ給へり三国の例証
一にあらすたれも疑を成へからざるをや
抑弘安二年六月より嘉元々年
十二月に至まで首尾廿七年の
間に臨終する時衆惣して二百六
十九人也<sup>〔傳四十二人
尾百二十六人〕</sup>此内制戒に
そむく旨ありといへとも廻心せさりける
間往生を遂さるもの七人ありける
となむ縦小罪なりとも制戒に
背事あらハ尤廻心し侍へき者哉
其外の在家の弟子非人の類に至る
まで往生をとくるもの其数を記に
違あらず昨日ハ如来の滅後に生

たる悲を沙羅林の露にそへ今日ハ
弥陀の名号にあへる喜を歡喜樹
の花にひらく今生ハ穢土の終聖
衆來現の夕速に無生即生の往
生をとけ後世は浄土の始蓮華
初開の朝早く生即無生の法忍
をうる者歟今まのあたり如此の勝利
をみる争信心を發すゝらむ仍
彼行状をあらハさむためにこの
繪図を模す唯是信謗共に因を
成し親疎おなしく縁をむすハむ
となり

(奥書)

本奥云

弟子宗俊池淵部大輔宿因多幸而奉逢上人之济度得聞

出離要法言其恩德高於天厚於地仍自建長文永
往事至永仁正安之行儀図師資之利益備弟子之
報謝類集而為十卷殆揚十之一二此中或有四句
偈或有七言頌或有人之返報或有自之詠歌皆
惟出離生死之肝心往生浄土之要路也至段々詞者
僅記録尽意之領解更不話賢哲之後難苟思其
事不好其事華唯欲見者之易論聞者深誠
者也就中遠及於遐代遍為備人々結縁置一本於
道場若依此繪図有發心之人者互去婆婆苦
域同至安養樂邦而已